

## ■ 巻頭言 ■

## 創立当時をふり返って

エネルギー・資源研究会初代会長  
東北大学名誉教授

前田 四郎



石油多消費を基盤とした我国の工業形態が第1次のオイルショックによって大打撃を受け、産官学は勿論、一般国民にも大きな不安を与えたことは御承知の通りである。早急に対応をせまられた業界は勿論、学界官界でもそれぞれに対応を検討し、通産省も早速「〇〇計画」なるものを出し、業界、学界も研究に取りかかったが、最も肝要な、議論の根拠となるエネルギーに関するまとまった正確な情報が少なく、在来一般の研究のように各個バラバラの研究では、広範囲に亘るエネルギー対策を満たし得る可能性もなく、研究者の間では焦燥感さえ生じていた。そのうちに第2次オイルショックになるわけで、これに対応するには特に産官学が別個に動くのではなく、広範囲に亘る正確な情報の交換、把握と研究の緊密な連繫が必須であると痛感されるに至った。

丁度この頃(昭和54年秋)だったと思うが、京大、水科教授(現会長)が当時東北大学長であった私の所に来られて、エネルギーや資源のことを考え、自由に討論し、正確な広い情報を交換し合う産官学を一体とした研究会を作りたい。ついては会長をやれと言う訳である。余りに唐突で面喰らった。趣旨はもとより賛成であるが果たしてどんなものをつくるつもりか、何をするのか、その組織・基盤(財政的)等何もはっきりしないし、彼も言わない、というよりまだはっきりとはせず言えなかったのかも知れない。研究報告会、講演会位迄はわかったが、会誌も発行したいらしい。水科教授は例によって、大雑把なしかし自信をもった話し方で、熱心に説明され、実務は関西でやるが全国的なものであるから私に会長になれという訳である。

学長の職が忙しいからとか、適任でないから等と通り一遍の辞退等で引き下る相手ではない。結局もう少し考えさせてくれということになったが、もうこの時点できめられたようなものであった。研究会全体のイメージがはっきりせず、時々考えては電話で相談というより希望をのべたり、質問したりしたのを覚えている。エネルギーのほかに資源も問題であるが、こちらは範囲が広すぎるが一緒にあつかうのかどうか、忙しい会社や大学の先生方だけでは実務は出来ないが、これを誰がどこでやるのか、発足に当たっての資金をどうするのか。これらは実は心配して話には出したが私は直接動いたわけではない。しかし結局はいざという時に、実際の責任をとればよいというつもりで自分を納得させて、大雑把なままで兎に角会長を引きうけることにした。

私も実は心配性の人間のつもりでいるが自分なりに納得すると、後は呑気なもので水科氏にまかせっつきりで、何もわからないままに55年4月の設立総会の当日を迎えてしまった。多くの同憂の士が集まられ、盛会なのに驚き、改めて自分の責任の重さを感じた次第であったが、実はそれも会に出ていた時だけで、また仙台に帰ると会のことはすべて忘れ、理事会に出るとまた思い出すというわけで、今考えると全く申し訳のない次第であった。

初期に気になったのは会誌の内容と経理である。幸い編集には佐藤俊教授が当たられたので高校の誼みでざっくばらんをお願いしたが、果して面白い企画が続くだろうか、一わたり照会のシリーズが終ったら、第2陣はどうなるのか。財務の面でも健全な会の運営が必要だが、何しろ基金なしで借金からの出発であったので、委員の方々にも出血サービスをお願いせざるを得なかった。この方面の大体の目安は2年目位であったと思う。

思い起せば、このような方面に全く無経験な私がかかも副業として会長となり、始まったわけである。全般にわたっての水科現会長の包容力と熱意、英断、佐藤教授の緻密な編集企画、このような事業に対して経験豊富であり常に積極的発言をされた森教授の熱心な御援助、地味であるが着実健全な安田氏の財政的な御努力、更にそれらの蔭で会の運営に当たられた各委員や事務の方々の御努力、これらの御苦勞の上に今回輝かしい5周年を迎えることになったわけで、感無量といわざるを得ない。

時宛も原油は値下りして、エネルギーの問題に対する国民の危機感はうすれたように見える昨今である。しかしエネルギー不足の本質的問題は何等解決されておらず、いつエネルギーや資源の危機がおきてもおかしくはない。この世界的な危機に対して、我国として十分な対策がとれるよう平素から準備しておく必要のあることは論を俟たず、その状況は本会発足時と少しも変わっていないのである。今後の本研究会の御発展を心から切望したい。

